

Glocal Tenri



8

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.8 August 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
概念の違い
／永尾教昭 1
- ・ 日本語教育と海外伝道 (25)
歴史の中の留学生④
／大内泰夫 2
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (23)
思想の普遍性と特殊性の逆説的関係
／金子 昭 3
- ・ イスラームから見た世界 (4)
天理教とイスラームの出会い②
／澤井 真 4
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で—(24)
仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑦
／成田道広 5
- ・ 遺跡からのメッセージ (60)
清水風遺跡で発見された「鹿と武人の絵画土器」
／桑原久男 6
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関
係試論 (34)
植民地の歴史認識の再考へ
／森 洋明 7
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観
と教への伝播— (11)
5. コロンビアの体質 2
／清水直太郎 8
- ・ 天理参考館から (21)
スポーツの歴史と文化 (2) 「走る」その 2
／幡鎌真理 9
- ・ ヴァチカン便り (45)
ミサの再開
／山口英雄 10
- ・ 思案・試案・私案
「碑」の字表記問題再考 (8)
／八木三郎 11
- ・ おやさと研究所ニュース 12
『グローカル天理』年間購読のご案内

巻頭言

概念の違い

おやさと研究所長 永尾教昭 *Noriaki Nagao*

海外で天理教の布教をする場合、厄介な一つの問題は概念の違いであろう。つまり、天理教の教理の中にあるものが、その国にその概念が存在しない場合、いかに得心させるかが問題となる。

天理教は仏教に由来するものではないが、その教理には仏教徒には理解しやすいものも少なくない。例えば、いんねん、生まれ変わりの教理などがそうだろう。天理教で説くこれらと、仏教の因果応報や輪廻転生とは同じではない。ただ、これらを知識として知っている仏教徒には、天理教の教理を理解する手がかりが多くある。

一方で、いわゆるセム系宗教の信仰を主とする欧米圏などの人たちに、生まれ変わりという概念はないと思われるので、それらは理解の範疇外にある。事実、筆者は天理教ヨーロッパ出張所長を務めていた頃、ほぼ毎年、カトリックの在家集団などが主催する多宗教ミーティングに参加したが、ある年、その席で正教系の聖職者から「あなたは、本当に今の奥さんと前生からの縁で結ばれたと信じているのか」と問われた。天理教には、夫婦、あるいは家族となるのは偶然ではなく、前生もしくはさらに遡っての深いいんねん、言い換えれば神の思惑があってそうなるのだという教理がある。したがって、筆者はその際「もちろん、そうだ」と答えると、彼は驚いて「信じられない」と言ったことを鮮明に記憶している。確かに、そもそも生まれ変わりを説かない信仰者が、前生のいんねんなど理解できるはずがない。

また天理教には、結婚した女性は、いんねんある元の家に戻るのだという教理がある。これについては、欧米はもとより、同じアジアの韓国や台湾でも理解が難しいのではない。この両国は夫婦別姓、つまり結婚しても妻は夫の姓に変わるわけではない。また、ある姓を残すために夫が

妻の姓を名乗る、養子という制度もないだろう。こうなると、日本の、いわゆる「家」という概念は生まれえないのではない。したがって、元の家に戻ると説けば、何か物理的な意味で、元々住んでいた家屋にまた住むのだといった誤った理解さえされかねないのではないかと思う。

さらに、やはり所長を務めていた頃、あるフランス人信者から「天理教の教理は素晴らしいが、働くことが喜びとは、どうしても理解できない」と言われたことがある。確かにキリスト教では、安息日がホリデー、つまり聖なる日であり、労働はどちらかと言えば強制された義務、あるいは行という観念の方が強いだろう。もっとも、プロテスタントではマックス・ヴェーバーがその著書の中で「世俗的日常労働に宗教的意義を認める思想を生み、……『天職』という概念の中にはプロテスタントのあらゆる教派の中心的教義が表出されている⁽¹⁾」と述べているように、労働をむしろ天職と考え尊重したとされるが、伝統的なカトリックは必ずしもそうではないだろう。したがって、天理教の働く喜びという教義が理解できなかったのだ。

こういう場合、どうすべきか。ここは時間がかかっても婉曲的表現をするのではなく正面突破、つまり教理をまっすぐに説いていかざるを得ないのではないか。概念がないから、この教理は説かないという姿勢はいずれ綻びが見えてしまうと思う。ただ一旦回り道をしたほうが良いと思う事柄もある。神に対する「お供え」などは、教会への献金という形から入った方が良いと思う。

[註]

(1) マックス・ヴェーバー『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳)岩波文庫、1989年改訳、109頁。

歴史の中の留学生 ④

エラケツの日本語

エラケツが来日したのは昭和4年で、彼は当時19歳であった。それまでパラオではどのような日本語教育が行われていて、エラケツはどのように日本語を習っていたのだろうか。それを考えるカギになる資料がインターネットに公開されていた。三田牧「想起される植民地経験—「島民」と「皇民」をめぐるパラオ人の語り—」(『国立民族学博物館研究報告』33巻1号、2008:81-133)である。そこには次のように述べられている。

国際連盟の委任統治という統治形態をとったパラオにおいて、日本がとった教育政策は朝鮮や台湾などとは異なる。また、軍政(1914年～1919年)、民政(1919年～1922年)、南洋庁(1922年～1945年)という統治体制の変化によって教育方針は変化する。ここではパラオにおける教育方針の変遷の分析から、パラオにおける教育の特徴をおさえておく。

日本が南洋群島小学校規則を定め、コロールに学校を作ったのは軍政期の1915年12月である。この学校は修業年限が4年で、満8歳以上満12歳以下のパラオ人児童を対象とするものであった。翌1916年にはマルキョクにも学校を設立している。ちなみに移民によって増加した日本人児童のための学校がコロールにできたのは1919年であった。(三田2008:94)

また民政期(1919年～1922年)については、次のような記述がある。

民政期に入ると1918年6月に南洋群島島民学校規則が制定される。この時パラオ人のための学校は「小学校」から「島民学校」へと改められた。修業年限は3年とされたが、卒業後「補習科」において2年間学ぶことが可能になった。1918年の時点では、コロールとマルキョクにある2校の「島民学校」に加え、ペリリュウ、アンガウル、ガラルドに分校が作られていた(南洋群島教育会1938)。

1922年、南洋庁がおかれ委任統治がはじまると、島民学校は公学校と改称され、「国語ヲ常用セザル児童ニ普通教育ヲ授クル所」(南洋群島教育会1938:197)と定められた。義務教育は「本科」における3年で、優秀な生徒はコロール公学校に設置された「補習科」でさらに2年就学できた。またこの時、入学年齢について「満12歳以下」という制限を廃し、「満8歳以上」とした。またコロールに木工徒弟養成所が設立され、補習科を終了した男子生徒のなかから特に優秀な者を選抜で入学させ、2年間修業をさせた。またガラスマオにも公学校が新設された。(三田2008:95)

これらのことから考えて、民政時代(エラケツ8～11歳頃)南洋庁施政時代(エラケツ12歳～)となるので、民政時代から南洋庁時代の初め頃の国語教育を受けていたものと思われる。エラケツも日の丸を掲揚し、「君が代」を歌い、勤労奉仕もしていたのだろうが、日本に対してどんな気持ちを持っていたのだろうか。

エラケツのエピソード

エラケツの人物像を知るためのエピソードはたくさんある。その中から、いくつか紹介したい。エラケツは昭和8年6月に帰島する際に盛大な送別会も開かれて、もうしばらく日本には来ないと思わ

れていたが、何と3ヶ月後の9月には2度目の来日をしてきた。その時には実父のオバク・アマズ・エラソブを連れて来た。北村や宮武をはじめとした友人達はさぞや驚いたことだろう。最初に帰島した翌月の7月17日夕方、NHKラジオでエラケツの放送があった。25分の全国放送で、パラオ島の紹介や歌やお話をしていただろう。この放送について東洋民族博物館の九十九豊勝がエラケツにいろいろアドバイスしてはしいが、放送後に九十九氏を通して『朝日新聞』の記者がインタビューをしたところ、その1週間後に大きくエラケツのことが新聞に報道されて「日本娘をお嫁に貰いたい」ということが紹介されたらしい。それに対して10名の花嫁志望が名乗り出たとのことだ。しかし、結局、花嫁の話はうまくいかず、11月に再度、パラオへ帰島した(北村信昭『奈良いまは昔』1983:68-78)。他にも北村が残した回顧録などエピソードはたくさんあるが、とにかくエラケツの交友関係の広さと皆に好かれていた人物だということをおぼせるものが多い。

日本に永住も考えていたエラケツ

昭和9年4月13日付のブラジル日系人向け新聞『聖州新報』には、「内地に永住する決心した南洋酋長の息エラケツ君」という見出しで、花嫁探しの後の記事が書かれているが、パラオに戻ったエラケツは日本に永住する希望も持っていた。南洋庁に勤務していた某氏からパラオで日本人女性と夫婦生活を送るのは環境の違いから難しいだろうという忠告を伝え聞き、「そうなら私は永住の目的で来春日本へ行く、私の現在の生活を維持するはどうしても日本婦人を妻としなければならないで何か職業について一市民として独立し、年々の希望である法律を研究するため法律学校に通いたいと思う、勿論不況の時だから贅沢は出来ないが春行くまでに探してほしい」と述べている。河路氏の研究では、エラケツは「土地問題」を抱えており、その解決のために法律を日本で学びたかったようだ。「土地問題」といっても、些細な土地に関する問題ではなくパラオの島民にとっての大きな問題である。エラケツは北村に島民たちが、その伝来の私有地を官有地にされることの苦痛をよく訴え、この問題を法的に闘いたいと漏らしていたし、国際連盟にも訴えたいとも言っていた(河路由佳「昭和初期のパラオからの留学生エラケツ(Ngiraked)の留学前後」『ことばと文字』13号、2020:201)。エラケツは帰島後も、布教しながら具体的に島の未来のことを考えていたのだろう。日本人の花嫁募集も将来を見据えてのことだったのかとも思えてくる。しかし、南洋庁が置かれ統治されていた当時の情勢からエラケツは反政府的だと受け取られ、投獄もされたようである。時代がそうだったとはいえ、信仰的にも生まれ変わったエラケツが現実の世界で正しいことをしようと思っても、苦難の道を歩まなければならないことは悲しいことである。またそのことを知っていた北村をはじめとする友人たちも、さぞや心を痛めたことだろう。



パラオ諸島とエラケツ在世時の天理教の教会

モーゼス・メンデルスゾーン

カントと同時代人に、モーゼス・メンデルスゾーン Moses Mendelssohn (1729-1786) というユダヤ人の啓蒙主義思想家がいた。彼は独学で哲学を修め、また諸外国語にも堪能であった。ベルリン・アカデミーが募集した懸賞論文では、数学的証明を形而上学に援用する論文により 1 位 (カントは 2 位) を取るなど、優れた才能を示した。しかし、当時のドイツでユダヤ人の教職は認められず、身を実業界に置きながら在野の哲学者として生涯を送った。彼は「同化ユダヤ人」として単なるユダヤ教哲学を超えて、普遍的な宗教哲学者としての地歩を築いた。

メンデルスゾーンはまた、人格高潔な人物として在世中から知られていた。「ドイツのソクラテス」とも呼ばれ、レッシングの戯曲『賢人ナータン』のモデルにもなった。この戯曲の中では、「三つの指輪」の話が登場する。三つの指輪とは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を喩えて言ったものである。この三つの宗教は同じ父なる神から生まれた息子であるが、父なる神に直接まみえることができない今となつては、これらの宗教の真理を判定する基準は、それぞれの信者がその教えにふさわしい生き方をする⁽¹⁾ことでしか示すことができないというのである。

ところが、スイス人牧師で作家のラーヴァターは、メンデルスゾーンの立派な人格の噂を伝え聞き、「それほどすぐれた人物は当然キリスト教徒でなければならぬ」と、彼にユダヤ教からキリスト教へ改宗を勧告する公開状を出した。これに対して、メンデルスゾーンは、ユダヤ教は啓示された律法であつて宗教ではなく、また自然理性 (科学的認識) と人間の信仰の普遍性は両立する旨を主張する弁明書を刊行し、ラーヴァターの勧告を退けた。ラーヴァターなる人物、何という余計なお世話、何という思い上がりであろうか。

キリスト教社会のヨーロッパにあつては、そうしたユダヤ教蔑視の雰囲気があつたのは事実である。メンデルスゾーンが有名になればなるほど、その世界市民的で啓蒙主義的な思想にもかかわらず、彼はユダヤ人として有名になるばかりであつた。ユダヤ人にとっては、キリスト教徒になることが社会的成功のパスポートであつた。彼の意に反して、メンデルスゾーンの子供たちは皆キリスト教に改宗してしまつた。彼の孫の作曲家フェリックス・メンデルスゾーンは、熱心なプロテスタントの信仰者としてよく知られている。彼は、埋もれていたバッハのマイ受難曲を再演して好評を博し、また堂々たる交響曲「宗教改革」を作曲したのだった。

ユダヤ系思想家の世界志向性

ユダヤ教がユダヤ人の民族宗教であるのに対して、キリスト教は人類に開かれた普遍的世界宗教であると言われる。教えの内容としては確かにその通りかもしれない。しかし、個々の思想家を見ていると、それとは違った姿が見えてくる。ユダヤ系の思想家の場合、マルクス、フロイト、フッサール、ブーバー、ベンヤミンなど、いずれも世界市民的な志向性を持った思想家が多い。一方、ドイツ観念論のフィヒテやヘーゲル、20 世紀ではハイデガーなどがそうであるが、キリスト教的立場に立

つ思想家のほうに、しばしば国家的・風土的な固有性・特殊性を感じることもある。その北欧版がキルケゴールであり、彼の思想にはデンマーク国教会や北欧ロマンティックとの関わりが深い影響を与えている。してみると、キリスト教が教えとして世界志向 (グローバル) な分だけ、キリスト教思想家は地域志向 (ローカル) になり、ユダヤ教の教えが地域志向 (ローカル) な分だけ、ユダヤ教 (人) 思想家は世界志向 (グローバル) となるのであろうか。我々は、そこに生身の人間における思想の普遍性と特殊性の逆説的關係を見ることができる。

キルケゴールの場合は

キルケゴールは、「人間いかに生きるべきか」を徹底して掘り下げ、実存思想に大きな影響を与えた。彼自身も自らの実存を賭して、このテーマを考え抜き、生き抜いた。だが実のところ、彼自身の本当の問題意識はそこにはなかつた。彼はむしろ、キリスト教世界に真実のキリスト教、すなわち新約聖書のキリスト教を導入するという、特殊の中の特殊ともいべき自覚と使命感を持っていたのである。そして、そのことが徹底してなされたがゆえに、彼の問題意識は、人間が真に人間として生きようとする限り、必ず引き受けるべき普遍的な問題意識へと突き抜けることができたのであつた。

最晩年のキルケゴールはデンマーク国教会を相手に「教会の嵐」とも形容される教会闘争を行い、ついに力尽きて路上に昏倒して病院に運ばれ、そのまま亡くなった。42 歳の人生であつた。デンマーク国教会という巨大な存在に単身で立ち向かうのは、蟷螂の斧を振り上げるに等しい。真実のキリスト教を探求するのであれば、それまで通り自らの信仰信念の下で教化的著作を書き続けても良かったのではないか。しかし、彼にとっては耐えきれないところまで、デンマーク国教会のあり方が彼の信仰的危機感を襲つたのであろう。

キルケゴールの教会闘争は、ある意味きわめてローカルなものであつた。しかしローカルな問題であつても、その問題を根底から徹底的に掘り下げて行くことによって、グローバルなものに突き抜けていくことができる。キリスト教思想家キルケゴールが非キリスト教圏でも広く読まれるのは、そこに理由がある。これは、ユダヤ系の思想家たちが最初からグローバルな志向性を持って、その思想を展開しているのとは対照的である。

どの人間も、一人ひとりが掛け替えのない個人 (単独者) であり、また自分自身が生まれ育つた国や風土や言語と切り離すことができないと同時に、普遍的な人類共同体の一員でもある。それゆえ、思想家がどの宗教的立場に立ち、どの思想的展開を目指す場合でも、何らかの形でローカルな要素とグローバルな要素とが両方必要になってくる。そして、卓越した思想にあつては、そうした普遍性と特殊性がとことんまで突き詰められ、緊張感を持って共存しているのである。

[註]

(1) 山下肇『近代ドイツ・ユダヤ精神史研究』有信堂高文社、1980 年、54 頁。

イスラーム研究の整備

1930（昭和5）年、中山正善2代真柱の中国巡教を契機として、天理教の海外布教のための準備が進められた。書籍などの文物は、同年に開館した天理図書館（現天理大学附属天理図書館）に収蔵された。また民俗史料は、同年に天理外国語学校本館（現天理大学1号棟）の4階に開設された、海外事情参考品室（現天理大学附属天理参考館）に収蔵された。その後、1943（昭和18）年に天理教垂細垂文化研究所（現天理大学附属おやさと研究所）が創設された。現在、これら3施設は天理大学の附属施設であるだけでなく、天理教の対外的な活動にも大きな役割を担っている。

イスラームに関する天理教内の学術活動として、『天理時報』に、東南アジア地域の宗教情勢が論じられた際に、「回教」の語が散見されていた。しかしながら、記録のかぎりでは、1943年7月27日から29日まで、天理図書館で開催された、共栄圏宗教講座が学術活動の嚆矢であろう。講座の第1日目には、大久保幸次（回教圏研究所長）が「共栄圏の回教」と題して講演している。大久保は、イスラームの聖典クルアーンを部分的に邦訳した最初の人物であり、戦前のイスラーム研究の権威者と呼ぶべき人物であった⁽¹⁾。大久保は、1938（昭和13）年に設立された回教圏研究所の所長となり、1940（昭和15）年に改称された回教圏研究所でも所長を務めた。敗戦とともに解体される回教圏研究所であるが、戦前には、蒲生礼一、小林元、竹内好、そして井筒俊彦など、戦後のイスラーム研究や東洋学を牽引する研究者たちが在籍していた。

海外伝道という観点からも、戦前において、天理教はイスラームに大変注目していた。しかしながら、イスラームに関する教内者による本格的な記述は、筆者が確認したかぎりでは、2代真柱による文章だけである。それ以降の学術的研究は、むしろ戦後を待たなければならない。

上田嘉成とイスラーム

日本の敗戦にもかかわらず、イスラームに関心を抱き続けた天理青年たちがいた。彼らは、天理教の「復元」や天理教学の礎を築くうえで、大きな役割を果たしていくことになる、上田嘉成（1906～1985）と諸井慶徳（1914～1961）である。

上田嘉成が行ったイスラーム研究とは、天理教の「おふでさき」とイスラームのクルアーンと比較研究であった。1955（昭和30）年、彼は、『復元』（27・28号）に「天理教祖の世界観」を著わしている⁽²⁾。この論文は、天理教の三原典のなかでも、特に「おふでさき」に現れた天理教祖の世界観を明らかにしようとしている。天理教の世界観を理解するうえでも、また現代哲学が取り組む問題を宗教的視点から扱っているという点でも、上田の論文は、多くの示唆を与え続ける非常に重要な研究である。

「天理教祖の世界観」には、「各種世界観との対照」という3つの論文が付されているが、その第1章が「コーランに於ける世界観の考察」であった。「序言」において、上田は次のように論じている。

「おふでさき」の世界観と各種の世界観とを比較対照することは、「おふでさき」の世界観をより鮮明に理解する上

に有用であると共に、宗教学の労作としても、比較教理学の分野に向う努力として、興味ある事と思う⁽³⁾。

ここで上田が用いた「比較教理学」とは、戦後の日本の宗教学を牽引した岸本英夫の言葉の引用である。比較教理学とは、各宗教に見られる教理の客観的な比較研究であるという意味で、「比較宗教学」（comparative study of religion）であった。そして、上田は、天理教とイスラームの世界観に関する比較研究を試みたのであった。

「おふでさき」をはじめとする天理教の三原典や、イスラームにおける「クルアーン」は、宗教学的にみれば「聖典」と呼ばれる。神の言葉を記した聖典は、宗教的信仰の根幹を成している。「天理教祖の世界観」において、上田は、「おふでさき」における「世界」や「よ」（世）などの語に注目した。そのうえで、「コーランに於ける世界観の考察」においても、彼はクルアーンに見られる「世界」や世界観を考察する。それは、イスラームの世界観を理解することを通して、天理教の世界観をより掘り下げて学び、理解するためであった。

天理教とイスラームの「世界」を比較する

上田は、クルアーンの世界観を考察するために、大久保幸次のクルアーンの邦訳や、イスラーム研究で長らく用いられてきた、ジョージ・セール（George Sale, 1697～1736）のクルアーン英訳書を用いている。彼が指摘するように、クルアーンでは、「現世」や「来世」という語が頻繁に登場する。もちろん、クルアーンは来世に強調点を置いており、現世は「空しき戯れ」に過ぎない、と上田は表現する。

こうしたクルアーンの「世界」概念に対して、上田は天理教の信仰を以下のように説明する。

天理教の信仰に於ては、世界は一つしかない。この地上、この宇宙こそ、唯一の世界である。但し来生は有るが、同じこの世に更生して来る⁽⁴⁾。

天理教では、「出直し」という語で死が説明されるように、人間は、我々が住む現世という一つの世界で、何度も生まれ変わりを経る。それに対して、クルアーンは、その基調として現世と来世というコントラストを通して、世界が描写される。そこで描かれた「世界」とは、終末における審判の後に広がる天国と地獄という「世界」である。

「世界」という視点から、上田はイスラームの世界観を考察し、天理教の世界観の特質を明らかにしようとした。この意味で、彼のクルアーン研究は、比較宗教学に根ざしていた。また、信仰に基づく教理理解という意味では、キリスト教神学で言う比較神学（comparative theology）の水準にもあった。上田のクルアーン研究は、彼自身が生涯をかけて目指した天理教教祖の面影や原典研究と通底していたのである。

[参考文献]

- (1) 大澤広嗣「昭和前期におけるイスラーム研究—回教圏研究所と大久保幸次」、『宗教研究』（78巻2号）、2004年。
- (2) この論文は、その後、1968（昭和43）年に『天理教祖の世界観』として出版されている。
- (3) 上田嘉成「各種世界観との対照」、『復元』（28号）、3頁。
- (4) 同上、8頁。

仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑦

変容と格義の関係

中国における仏教教理の変容は、疑經の浸透だけでなく、仏典の漢訳そのものの形式によっても進んでいったと思われる。漢訳とは、起点言語であるインド諸語から目標言語である漢語への変換を意味する。しかし、インド諸語に固有の思想や宗教性が反映されているのと同様に、漢語にも特有の文化的要素が含まれているので、単一方向で直線的な営為として漢訳を語ることはできない。

仏教が伝来した初期には、『老子』や『莊子』など古来の伝統的思想の素養に基づき仏教の理解がなされた。その受容過程には、上述の古典に共通する部分を手掛かりに伝来の經典を解釈していくという思想的なフィルターが存在していた。このような思想的営みは「格義」とよばれ、それに基づく仏教は「格義仏教」とされる。義を格(量)る、あるいは義を格(致)すことを意味するこの格義は、「配説」とも呼ばれる。悟りの境地である「泥洹・涅槃(nirvāṇa)」は、『老子』において最も重要な述語である「無為」を配して説かれ、在家信徒が順守すべき不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の「五戒(pañcaśīla)」は、儒教の五つの徳目、「五常(仁・義・礼・智・信)」として説かれた(小林, 1997: 296)。さらに釈迦の悟りである「覺(bodhi)」には「成道」など、道の訳語が広く用いられた。インド諸語の語義からすると、この語は「目覚め」を意味し、道という概念からは程遠い。にもかかわらず漢訳において道が多用された要因は、老莊思想で説かれる最上の概念である「道」が影響していたからであると容易に想像できる。

このような格義の事例は、仏教の救済観にもみられる。釈迦は、諸々の事象は独立的存在性を持たず無自性であり、互いに依存し生じているとし、「縁起(pratītya-samutpāda)」を説いた。漢訳の初期、安世高はこの教理に対し、直接的な原因と間接的な原因を想定して「因」と「縁」にわけて「因縁」と翻訳した。安世高は『安般守意經』を翻訳し、現在の生存が過去の生存に規定され、さらに来世は現世によって規定されるという、過去、現在、未来の三世の因果関係について仏教独自の救済観を提示した。しかし、仏教伝来の初期段階において実際に中国で定着した思想は、この世界の事象のあり様を分析した縁起や、前世、現世、来世を輪廻するという三世の因果関係ではなく、現世と来世に限った因果応報の思想であった。これは、仏教伝来以前から存在していた道教の倫理基盤である功過思想、つまり天は人間の行為を監視し、善行には賞を、悪行には罰を与えるという思想が根底にあり、その延長でこの教理を受容したからであると河野は指摘している(河野, 1992: 64)。この因縁の訳語はのちに「縁起」に改められ、その教理概念は修正されていった。

また、インド伝来の教理である「空(sūnya)」の思想は、老莊思想の概念である「無」を配して説かれた。空の思想の根幹は、一切は縁起によって生じたものであり、実際にはそれらの実体はないという無自性である。一方、老莊思想においては、この世界に無と有を想定し、その相互有機的な関係から世界を一元的に捉え、万物の根源に虚無を置く。両者には思想的に共通する部分もあり、特に六朝時代には、この老莊の無をもって仏教の空の思想が理解されていた。しかし、両者には、空あるいは無という境地に至る過程に、精進が必要か否かという決定的な相違がある。老莊の思想においては、虚無の境地に達するには、ただ人為

をすてさえすればよいという、無為自然の思想が基盤にある(森, 1969: 139)。しかし、仏教の出家者には、世俗を離れて厳格な戒律に基づく禁欲的な生活が課せられており、空を観ずるには精進が必要とされるので、両者の相違は明らかである。

この格義を教理の受容と変容の視点から考えると、インド諸語から漢訳された仏教語が、インド諸語の語義と、中国語の語義の間で揺らぎつつ展開し浸透してきた過程が読み取れる。翻訳には、語義の二重性によるブレが生じる「はざま」があり、そのはざままで語義決定は常に揺れ動く。宗教文献の翻訳の場合、そのはざまとはまさに教理の受容と変容のはざまに他ならない。漢訳の初期、翻訳者は中国人の教養に重きを置き、その理解を促すために格義的な翻訳を施したため、訳語はインド諸語の語義からは遠ざかり、結果的に教理の変容を招くことになったと考えられる。

道安は、格義では正統な仏教理解は得られないとし、漢訳に規矩を与え、格義仏教を排斥するために経録を編纂したが、彼の教養自体は『老子』『莊子』『易』の「三玄の学」によって構築されており、中国固有の思想観念や用語を用いて仏教を解釈する以外に方法がなかったと思われる。実際、彼は「戒は猶ほ礼のごときなり」(大正蔵五五、八〇中)と述べており、また、中国古典に精通した弟子の慧遠には『莊子』の言葉をもとに説法することを許している(小林, 1997: 300)。つまり、格義を批判していた道安でさえ、格義がある程度有用であると認識していたと考えられる。

格義的翻訳によって、外来の教えである仏教を、中国人が日常生活の文脈で能動的に受容する土壌を育んだという点においては、格義は仏教受容に寄与したとも考えられ、さらに翻訳という営為を解釈学の視点からとらえるならば、格義も決して不自然な方法論ではない。横超慧日が、「当時の社会にあつて、道家や儒家の書が文化人の教養を形作つてみたから、仏教思想を紹介し解説するに外典に擬配する方法が頗る有効であつたのは確かであらう。」(横超, 1958: 204)と指摘するように、仏教教理と中国の伝統思想が格義によって相互に影響し、中国人の内面で新たなつながりを持ったのは事実である。

ただ、格義によって教理が変容してしまうという危機感と問題意識を持った最初の人物として、道安は中国仏教史において稀有な存在であったことは間違いない。実際、彼はより正統な教理理解を希求し、当時すでに西域で名を馳せていた鳩摩羅什の中国招聘に尽力した。道安の死から16年後の401年、鳩摩羅什は後秦の姚興に迎えられ長安にたどり着き、漢訳に従事した。その後の訳経史での鳩摩羅什の活躍をみると、道安の功績は特筆に値するといえよう。

翻訳には、語義の二重性による揺らぎが常に付きまとう。道安は、その問題を意識するだけの信仰的態度を身につけた最初の中国人であったと思われる。その態度からは、未知なるインドから伝来した仏教に対する絶対的な信頼と、求道者としての実直な人柄が垣間見える。

[引用文献]

横超慧日『中国仏教の研究 第一』法蔵館、1958年。

河野訓「中国に於ける縁起思想の受容」『宗教研究』66巻2号通号293号、1992年、pp. 47-69。

小林正美「格義仏教考」高崎直道他編『シリーズ・東アジア仏教3 新仏教の興隆』春秋社、1997年。

森三樹三郎『「無」の思想』講談社、1969年。

清水風遺跡で発見された「鹿と武人の絵画土器」

桑原 久男 Hisao Kuwabara

平成8年(1996年)、「鹿と武人の絵画土器」が出土した清水風遺跡の第2次発掘調査を担当したのは、私の畏友の故豆谷和之さんだった。清水風遺跡は、昭和61年(1986年)の第1次発掘調査で多数の絵画土器が出土したところなので、2回目となる発掘調査でも、同じように絵画土器が出土することが期待されていた。発掘調査が始まると、その予想どおりに絵画土器の破片が見つかったのだが、期待以上だったのは、パズルのように絵画土器の破片が次々につながり、「絵画」の全体の構成がついに明らかになったことだ。当時、まだ破片の状態の資料を豆谷さんに見せてもらい、資料で示された展開図を眺めたりしているうちに、私の脳裏に自然と一つの解釈が浮かんできた。その解釈は、「戦士と鹿—清水風遺跡の弥生絵画を読む—」と題した文章にまとめ、金関恕先生の古稀を祝う論文集『宗教と考古学』(平成9年、勉誠社)に収録させてもらった。

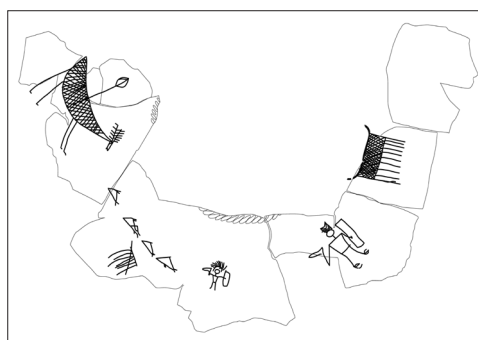


図 清水風遺跡出土の「鹿と武人の絵画土器」

建物、盾と戈をもつ人物、魚、鹿などの図像が並んだこの絵画土器は、いったい何を物語っているのだろうか。展開図の左側から見てみよう。一番左側の図像は、紛れもない

オスジカで、立派な二本の角が表現されている。シカの背中に矢が立つことは、発掘調査終了後になって、矢羽根を表した土器片が新たに接合して明らかになった。その右側には、4匹の魚が表され、魚の向こう側には大小二人の人物像が少し間隔を置いて描かれている。人物像の顔面には目鼻の表現がなく、正面を表しているのかどうか定かではないが、正面像だとすると、二人とも、右手に戈を持ち、左手は盾を持つ姿を表している。「干戈を交える」という表現があるが、干は盾を指し、戈は古代中国で発達した武器の一つで、柄に対して直角方向に刃部が装着される。天理大学附属天理参考館の展示室には、殷代(前13～11世紀)と戦国時代(前5～3世紀)に用いられた青銅製の戈の実物が展示されているが、とくに戦国時代の戈は、いかにも切れ味鋭く、実戦用の武器にふさわしい形状をしている。展示室では戦国時代の戈の柄も実物を見ることができ、同時代の青銅器の図像に描かれているように、全長170cmほどの長い柄を両手で振り回すようにして用いたことがわかる。弥生時代の銅戈も新旧のタイプが展示されていて、中国の戈と比較すると、装着部分が貧弱化し、非実用的な形態に変化してゆくことが確認できる。各地の弥生時代遺跡からは、戈の柄の実物も出土しているが、それらは押し並べて長さが約60cmと短いもので、清水風遺跡の絵画土器が表すとおり、片手で握ったと考えられる。清水風遺跡の武装した二人の人物は、互いに干戈を交えているのだろうか。

オスジカと武装した人物二人の間に、魚が描かれていることについても、天理参考館の資料が参考になる。山東省の孫家村そんかさんから出土したと伝えられる後漢代(1～3世紀)の画像石には、始皇帝が泗水に沈んだ周鼎を引き上げようとしている場面が描かれている。よく見ると、水そのものは表現されておらず、水の代わりに、水中の生き物として魚を描くことで水を表している。同じ様に、清水風の絵画土器も、魚は水の象徴として描かれたと考えられるのではないか。さらに言えば、魚の生息地ともなる水田を表しているのではないだろうか。水田は、稲作農耕の開始に伴って新しく成立した水辺環境だが、さまざまな生き物が生息するビオトープとしての役割も持っていた。大阪府の遺跡では、水田遺構から鉄製のヤスが出土したこともあり、水田での漁労活動が行われたことも推察される。

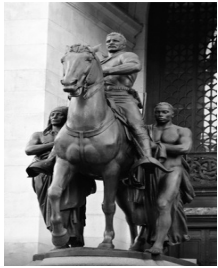
このように考えると、魚の下に描かれた「不明」表現が問題になる。魚の下にあることから、魚を捕まえる梁やなと見る見解もあるが、そうだろうか。『豊後国風土記』には、田の苗をいつも鹿が食べてしまっていたので、柵を造って待っていると、鹿が現れて柵の間に頸を入れて苗を食べようとしたという有名な説話があり、古代においても現代と同じく、獣害を避けるため、水田脇に柵を設置していたことが理解される。この説話を念頭に置いて、もう一度、清水風の絵画土器を眺めると、魚=水田の下に描かれている不明図像は柵を描いたものと見ることができ、全体としては、水田の脇に設けられた柵をはさんで、稲を食べようと水田に現れた鹿が、それを防ごうとする武装人物と対峙している構図になる。二人の人物は、互いに干戈を交えているのではなく、水田を荒らしに来たオスジカと対決しているのだ。この解釈がもし当を得ているとするならば、柵の右側は、人物と建物が示すように人間=文化の世界であり、柵の左側は、オスジカが象徴する自然の世界になっている。まさに、弥生人の世界観コスモロジーが浮かび上がってくるようだ。

一番右側の高床建物は、柱が10本表現されていて、この絵画土器が発見された当時は、空想上の表現かとも思われた。しかし、清水風遺跡に隣接する唐古・鍵遺跡では、本誌6月号の記事で紹介したように、豆谷さんが、二度にわたって大形建物を発見し、絵画土器の建物表現は実在の建物をモデルにしたと見なせるようになった。水田脇の柵列については、将来、唐古・鍵遺跡で水田が見つかったら、その脇で柵の柱穴が見つかるかもしれないなどと、豆谷さんと談笑していたものだが、残念ながら唐古・鍵遺跡では水田跡そのものが未だに発見されていない。

天理参考館には、唐古・鍵遺跡で採集された鹿の絵画土器片が展示されているが、これも、本来は他の図像と組み合っ場面を構成し、何らかのメッセージを発信していたはずだ。6月28日に実施した歴史文化学科のオンライン模擬授業「弥生土器に描かれた鹿」では、このように、天理参考館の展示資料が歴史文化を探る手がかりになることを、高校生たちに説明させてもらった。来春になり、多くの新入生たちとキャンパスで会えることを願っている。

植民地の歴史認識の再考へ

今年5月25日、アメリカで白人警官に押さえつけられた黒人男性が死亡する事件が起きたが、それがきっかけとなって、黒人差別に対する抗議活動がアメリカ国内だけでなく世界中で展開されている。その背景には、こうした差別事件が今回のことだけでなく、過去に何度も起きてきたことがあるからだが、それに加えて、アフリカに対する奴隷貿易や植民地の歴史、換言すれば白人による黒人への「暴力」の歴史認識の再考の動きもあるのではないだろうか。今回はこの連載のテーマにも関わる出来事なので、いつもの話題とは異なるがこのことに触れていきたい。



ニューヨーク市では6月21日、1940年から設置されている第26代大統領セオドア・ルーズベルトの像の撤去を発表した。その理由は、ルーズベルトが両脇に先住民と黒人を引き連れて馬にまたがっていて、「白人に従属する黒人や先住民」といった印象を与えるからだという。

ルーズベルトの像 また、世界史の「大航海時代」の項目では必ず登場する「新大陸発見」と合わせて教えられてきたクリストファー・コロンブスについても、彼の肖像画や銅像も各地で相次いで撤去されている。彼は、先住民に対する酷い扱い方や暴力的な植民地化への関与をめぐって、論議を巻き起こす存在でもあった。昨今、コロンブスの米大陸到達を祝う「コロンブス・デー」を、欧州の探検家が先住民に与えた苦難をしのぶ「先住民の日」に変更する自治体も増えているようである。その他、過去に人種差別的な政策を支持した政治家の名前を冠した研究機関や関連施設の名称が変更されているところもある。

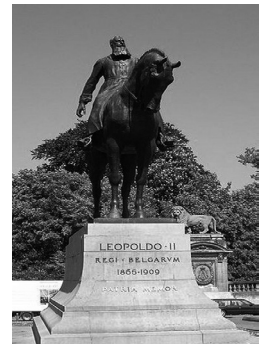
大西洋奴隷貿易（通称：三角貿易）の集積地であったセネガルのゴレ島でも、島内にある「欧州広場」と呼ばれていた場所が、「自由と人間の尊厳広場」に改名された。ヨーロッパ・アフリカ・アメリカという3つの大陸にまたがって展開されたこの奴隷貿易では、最低でも1千万人の奴隷が新大陸に運ばれた。大西洋の航行も劣悪な環境だったので、途中で命を落としたものも少なくないと言われている。したがって奴隷貿易の犠牲者数は、2千万人とも5千万人とも言われている。いずれにせよ、この大西洋奴隷貿易は人類史上最大規模の強制移民政策であった。

イギリスでは、ブリストルにある奴隷商人の銅像が海に投げ捨てられた。この銅像は、17世紀に貿易会社「王立アフリカ会社」の一員だった商人のもので、彼は子どもを含む多くの人をアフリカから新大陸に奴隷として送り込んだとされている。アフリカからの移民問題を抱えるフランスでも、パリの中心にあるレピュブリック（共和国）広場に、人種差別反対を訴える人々が1万5千人集まった。また、フランスの象徴でもある「マリアヌヌの像」に「私たちは息ができない」という垂れ幕が掲げられた。各地で広がるこうしたデモには黒人だけでなく白人も多く参加している。

歴史的に黒人とのあまり接点を持たない日本でも、渋谷で約3,500人が「NO JUSTICE NO PEACE」（正義のないところに平和なし）をコールしてデモを行った。また、こうした風潮のなか、美容業界においても「ホワイトニング」や「美白」といっ

た表現を控えるような動きが出てきている。

反人種差別の世界的な動向のなかベルギーでも、国王だったレオポルド2世の「暴力」に対する「自省」が叫ばれている。彼がコンゴ（現在のコンゴ民主共和国）で犯した「暴力」は本シリーズでも取りあげた（2017年8月号）歴史的事実である。国王は1878年、探検家スタンレーをコンゴ川流域に派遣し、さまざまな手段を講じて現地の長と条約を締結させ支配地を広げていった。ヨーロッパ列強国によるアフリカ大陸での領土争いが激化するなか、「ベルリン会議」（1884～1885年）が開かれ、この会議によって、ヨーロッパによるアフリカの分割は決定的となり、レオポルド2世はアフリカ中央部のコンゴ川流域の広大な土地を「私有地」として手にするのだった。彼はそこを「コンゴ自由国」と命名し、象牙やゴムなどの確保のために現地住民を酷使し、ノルマを果たせない者には罰則を与え、場合によっては手足が切り落とされるようなシステムを作りあげていったのである。こうした暴政の結果、人口も3分の1に激減したと言われている。結局この事実が国際社会にあかるみに出て、レオポルド2世の「私有地」はベルギーが国としてあとを引き継ぐのだが、現地の人たちにとっては白人に支配されることには変わりなかった。そしてまた、レオポルド2世には何の処罰もなく、国内ではむしろ「慈善家」として銅像も建てられていたのである。



レオポルド2世の銅像

このような歴史的事実に対して、ベルギーでは「植民地主義と人種差別の象徴」だとして、レオポルド2世の銅像を撤去した。そして6月30日、コンゴ民主共和国の独立60周年に際して、フィリップ国王がこの過去の歴史的事実に対し、王室として初めて「遺憾の意」を表明したのである。そこには今回の黒人差別に対する世界的な動きの影響もあっただろうが、ベルギーは昨年4月にすでに、植民地時代にベルギー人男性と現地人女性の間でできた子どもを強制的に本国に連れていったことに対して、「基本的人権を侵害」したものとして公式に謝罪している。過去の歴史の再考はすでに始まっていたのである。

今年は、かつて「アフリカの年」と言われ、17カ国が独立した1960年から数えて60年の節目の年にあたる。アフリカに多くの植民地を有したイギリスやフランスでは、これまで個人レベルでの「遺憾」の表現はあったものの、公式な謝罪はなされていない。植民地統治が約100年、さらにそれ以前の奴隷貿易などを合わせると500年にも及ぶアフリカへの「暴力」に対する謝罪は、確かにそれほど簡単なものではないだろう。なかには「植民地はアフリカの発展に貢献した」と考える人もいる。フランスでは2005年、最終的には破棄されたものの、アルジェリアの植民地を肯定的に教えようとする法案が出されたこともある。

植民地の評価はどうであれ、今日の黒人差別がヨーロッパとアフリカの関係性に深く関わっていることは明らかだ。そしてその歴史認識の再考を求める声が、より強まるのではないかと思われる。

5. コロンビアの体質 2

3) アンデス地域

読んで字の如く、国内のアンデス山脈の地域である。アンデス山脈は南米大陸の西側（太平洋側）を、北はベネズエラやコロンビアからチリの南の方まで、約7,500 km貫く大山脈である。コロンビアではベネズエラから南下してエクアドルへと続いているが、三つの山脈に分かれている。東アンデス、中央アンデスそして西アンデスと呼ばれている。この地域の面積は305,000km²の広さがあり、南からナリーニョ県の一部、カウカ県、バージェデルカウカ県、チョコー県、アンティオキア県、コーヒーゾーンのリサルダグ県・カルダス県・キンディオ県の三県、トリマ県、ウイラ県、クンディナマルカ県、ボヤカ県、サンタンダール県、ノルテデサンタンダール県、セサル県、アラウカ県、メタ県、カサナレ県、カケタ県そしてプトゥマヨ県の20県にまたがっている。地域の中で地理的や気候的な多様性のため、アンデス地域は高原や高地、森林地帯と盆地、傾斜地で構成されている。

東アンデスと中央アンデス山脈の間をマグダレーナ川がコロンビア国を貫いている。この川は、古くは独立に関する戦いにも関わっていて、また、産業はもとより、ゲリラ活動の発祥とも関係しており、コロンビアの歴史を語るには欠かせない川である。

アンデス地域がコロンビアで重要な地域である理由は、この地域が経済活動と文化活動がいずれも最も盛んな地域だからである。コロンビアと言えばコーヒー産業だが、その主要栽培地域がある。そして「エメラルド」の鉱物の地域（ボゴタの北東ボヤカ県地方）、後述の「オリノコ地域」と共に、ベネズエラに比較的近いコロンビアの西北部に位置するバランカベルメハを中心とする地域には石油が産出される。実は、この石油輸送パイプはしばしば（現在も）ゲリラに襲撃されており、石油産業に打撃を与えているのである。

地域の中で最も人口が多い地域である、首都のボゴタ、第二の都市メデジン、第三の都市カリも含む全体の人口は、2018年で34,419,398人であり、⁽²⁾コロンビア全人口の70～75%を占めている。⁽³⁾産業も多様である。人口の構成はほとんどメスティソ（白人と先住民の混血）で、中にはムラート（白人と黒人の混血）も存在する。

4) オリノコ地域（東部平原地域）

ベネズエラとの国境地帯を含み、コロンビアのまた別の「顔」を表現している地域である。別の顔とは、植物や動物、文化や生活様式に多様性が見られる地域ということ（450種の鳥類、260種の淡水魚類）、そして比較的多くの先住民が住んでいることである。⁽⁴⁾

この地方の面積は310,000km²で、7つの県を含んでいる。ピチャダグ県、パウペス県、グアピアーレ県、メタ県、グアイニア県、カサナレ県、そしてアラウカ県である。別名の「東部平原地域」のようにこの地域は山脈がない。文字通り平野部でベネズエラの国境まで隆起は少なく、500 mを越える高さの土地はない。気候はいたって暑く、この地域の約75%が雨季（冬）と乾期（夏）にわかれる熱帯性のサバナ気候である。後

の25%は森林地帯である。

オリノコ地域の産業は、農業、畜産業（主に牛で、肉と牛乳産業が盛ん）、鉱業などである。コーヒーを始め、花、バナナ類、米、タバコ、トウモ

ロコシ、サトウキビ、カカオなどがオリノコ地域の主要農作物である。家畜の種類は主に牛であり、この地域の名物料理は「焼き肉」なのだが、日本のそれとはことなり、いわゆる「南米式」である（写真参照）。⁽⁵⁾

特筆すべきことは石油の産出で、コロンビアは1986年よりは石油の輸出国になっている。1995年に31億バレルの埋蔵量が発見されている。石油パイプが首都のボゴタ、エクアドルの国境のナリーニョ県まで届いている。この他鉱業については、ニッケル、金、銀、プラチナ、そしてエメラルドが産出される。

*体験話

私はこのオリノコ地域を訪れたことがあり、牛と石油について、それぞれが食文化と基幹産業となっていることに驚嘆した。食文化では、朝食から普通に、肉を食するのだ。パンやジュース、果物という「都会」の小じやれた感じではない、朝からがつつり肉食である。テンガロンハットのカウボーイたちが、ステーキ・焼き肉を食べるのだ。コロンビアやメキシコは昼食がメインで量が多いが、朝食から肉とは……。彼らはカンポ（畑や牧草地など野外の意）に出て体力仕事をするからだと聞いた。飲み物もココアにチーズを入れて飲み、できるだけカロリーを摂取する。市内のいたるところに「焼き肉屋」が存在する。⁽⁶⁾

また、石油産業が盛んなオリノコ地域の街は、石油経済の恩恵を受けている。総人口4万人のプエルト・ガイタンという小さな田舎街がある。そこで空手道の全国大会が開催された。全国から選手やスタッフを入れると2,000～3,000人規模の人が集まれるだけの宿泊、体育設備があるのだ。道路は田舎道では考えられない程の質の高いアスファルト舗装で、4車線が主要幹線として完備されている。また、近代的なアリーナ、ホテルなど基幹設備がいずれも新しく、機能的である。これも石油のお陰である。

[参照 URL]

- (1) www.lifeder.com/regiones-naturales-colombia 参照
- (2) [https://es.wikipedia.org/wiki/Regi%C3%B3n_Andina_\(Colombia\)](https://es.wikipedia.org/wiki/Regi%C3%B3n_Andina_(Colombia))
- (3) <https://www.todacolombia.com/geografia-colombia/regiones-naturales-colombia.html> TodaColombia
- (4) <https://www.lifeder.com/economia-region-orinoquia/>
- (5) <https://www.lifeder.com/economia-region-orinoquia/>
- (6) <https://www.lifeder.com/economia-region-orinoquia/>



写真 オリノコ流域の焼き肉屋の様子

天理参考館創立90周年特別展「スポーツの歴史と文化」はまもなく閉幕を迎える。引き続き、展示資料のなかから「走る」にまつわるものを紹介したい。



図1 金製メダリオン ギリシア
紀元前5～紀元前2世紀頃 径6.8cm

展示室のなかでも、一際目を引くのが金製メダリオン(図1)であろう。紀元前のものとは思えない金色の輝きを今も放つ。現代の競技大会でも、優勝者にメダルやトロフィーが、その榮譽を称えて与えられる。これは古代ギリシアの副葬品だが、一体いかなる英雄の

「勇者のしるし」なのか興味は尽きない。このメダリオンに描かれているのが松明を持って走る半神半人のヘラクレスの姿である。これは「ヘラクレスの十二功業のうちの1つ『レルネのヒュドラ』」を表現していると思われる。ヒュドラはレルネの沼に住む9つの首をもつ蛇で猛毒を有していた。ヘラクレスが棍棒で頭をたたき落としても、その傷口から2つの首が生えてきて取拾がつかない。ヒュドラの傷口を松明の炎で焼いて生えるのを防いで退治した。松明を持った姿はその功業を表していると思われる。2世紀ギリシアの地理学者パウサニアスによると、オリンピア祭を始めたのがヘラクレスであった。徒競走をしてその勝者にはオリーブ樹の若枝で冠を編んで与えたのもヘラクレスであった⁽¹⁾。

オリンピア祭を始めたときとされるヘラクレスは、自ら討ち果たしたネメアーの獅子の毛皮を肩にかけただけの全裸で走る。前回紹介したように、古代オリンピックに参加する選手は全員一糸まとわぬ全裸の男性であり、神に愛される美しい肉体を誇示したことをヘラクレスは体現している。筋肉隆々の、腹筋の割れた七頭身の肉体は確かに美しい。奇しくも「最初のオリュンピア祭は前776年で、徒競走のみがおこなわれた⁽²⁾」。そうであるならば、このヘラクレスの走法は理想型であり、当時の人々の基本であったろう。右手右足と左手左足を同時に前へ送り出す、いわゆる「なんば走り」である。

「なんば」は「難場」とも表記され、山歩きなど難所の坂道で右膝に右手をかけ、勢いをつけて登っていく場面を想起していただくとわかりやすい。踏ん張れるのである。「なんば走り」、なかんずく「なんば歩き」は稲作農耕民の作業形態から発生した歩行法と言われている。鍬を使う場合、右手で鍬を振り上げて右足で踏み込む。餅をつくときも同様で、綱引きなど、要は力を出すときに有効である。相撲の右四つや左四つは力士が一番力を出しやすい組み手であ

り、柔道でも右手・右足前の組み手を右自然体と呼び、左手・左足前の組み手は左自然体である。力を興起するだけではない。余計なエネルギーを消費しなくて済む。忍者の走法は前に倒れそうな強い前傾姿勢を保ったまま次々に足を前に送り出す、これも小走りの「なんば走り」だが、ほとんど空中に浮かない早足歩きの延長線上にある走法なため、疲労も少なく距離を伸ばせるという。江戸時代まで日本人はこの歩き方(走り方)であった。

西洋での走法が古代ギリシアからどのように変容したか定かでないが、半人ヘラクレス神の走法は、近代になって「女神」の台頭によって塗り替えられた。ドラクロワが1830年に描いた「民衆を導く自由の女神」では、民衆の先頭に立って銃剣付きマスカット銃を左手に、フランス国旗を右手に掲げて走る女神は、もはや「なんば走り」ではない。自由を希求する勇猛果敢な女神の走法には、近代の軍隊の歩行が導入された。銃を持って匍匐前進をする場合や、銃を構えて進むときも「なんば走り」では身体は前に移動できない。腕と足を交互に逆に送り出す歩行法、すなわち右足を前に送り出すときは右腕をうしろに引き、左足を前に送り出すときは左腕をうしろに引くやり方がよしとされるようになったのである。これは下半身と上半身は逆の動きとなる「逆ひねり」の運動であるため、勇ましい女神もドレスの裾が足に巻き付いて走りにくそうには見える。この走法にはエネルギーが必要で、明治以降の日本人にとっては意識と自覚も要求された。それまで一般的だった「なんば走り」は一転して嘲笑の対象となったのである。

図2のおもちゃ絵と称する浮世絵版画に描かれているのは郵便配達夫である。郵便制度は明治4年に創設されたが、配達夫の採用基準は5貫目(18.75kg)の郵便物を担いで4時間に5里(19.6km)を駆けることというから驚きだ。恐るべきは江戸・明治の人の体力だが、ここでの配達夫は「なんば走り」である。近代化した日本で、明治なかばに至っても、体力を消耗しない有効で身近な走法だったにちがいない。

〈図は全て天理参考館蔵品〉

〔参考文献〕

- (1) 『スポーツの歴史と文化—天理大学附属天理参考館創立90周年特別展』、天理大学出版部、2020年、25頁。
(2) 同上、21頁。



図2 新版郵便手遊びづくし
日本 明治25年 大判一枚

ミサの再開

イタリアでは、本年3月から5月にかけてのコロナウイルスの急速な蔓延による感染を防ぐため、さまざまな規制が政府より発令された。その一つが集会が厳しく制限されたことである。そのために、カソリック教会におけるミサも開けなくなった。そのために、ヴァチカンのサン・ピエトロ教会をはじめとして、ほぼすべての教会が閉鎖され、日曜日のミサはもちろん、平日のミサも中止されてしまった。ただし、ローマ法王の個人的ミサは、国立テレビ放送RAIによって毎朝7時から1時間放送された。

コロナウイルスの感染状態も平衡状態を保つようになった5月上旬より、厳しかった規制事項が次第に緩和されてきた。そこで、「信教の自由」を標榜するイタリアの司教団より、集会の自由の規制緩和が要望された。イタリア政府も一考をめぐらし、教会でのミサの再執行を制限付きで許可した。これにより、元法王ヨハネ・パオロ2世の誕生100年を記念して、5月18日より、サン・ピエトロ教会を再開し、数の規制はあるが、ミサに参加することができるようになった。

規制のいくつかを記そう。参列者については次の通り。マスク着用は大原則。人と人との距離はしっかり保つこと。教会に入ってから、隣の人と最低1メートル50センチ離れること。教会のドアは開放のまま、つまり、ドアの取手に誰も触れないこと。37.5℃以上の体温の人の入場禁止。この2、3日の間にコロナウイルスの感染者と接触した者の入場禁止。教会側としては、壁、彫刻、床、さらにミサに使うマイク、聖書など一切を消毒しておくこと。ミサ終了時のホステリアの授受には、神父は専用手袋を使用し、そしてそれを拝受する信者の手にのせること。平和を希求する信者同士の抱擁や握手は禁止。ミサに使われる小雑誌の配布を禁止。懺悔の儀は広いところで行うこと。教会内の聖水器は空にすること。

この規制は、カソリックに対してのみならず、イタリアに存在する各宗教に対しても同じ効力を発揮するものである。

こうした状況の下では、ミサへの出席者は少ない。5月31日は、復活のキリストが天国に帰った「5旬節」の日だ。信者たちがサン・ピエトロ広場に正午12時に集まって、法王のアンジェルスへの訓示を拝聴する儀も再開された。しかし、広場に参集した信者の数は、思いのほか少なかった。法王のこのアンジェルスは2カ月余の日曜日には、広場に人々が参集することは禁止されていたので、法王は図書室でアンジェルスを述べ、それが終わった後、いつもの窓を開け、眼下の無人の広場に向けて祈りを捧げていた。法王はこの日、次のように語った。「このコロナウイルスの危機を脱するためには、神の光が、精霊の力が必要だ。さらに人間として、一致団結する必要がある。我々はコロナウイルスの患者のために尽力している医師や看護師に感謝すべきだ。この時期に経済的な衰退を嘆いている人もいるが、人命は経済よりも大切である。我々人間は聖霊の宿る神の体である。聖霊は神を、キリストを見せてくれた。世界は進歩主義者も保守主義者も見せてくれるが、聖霊は神の子達を見せてくれたのだ」と。

聖エジディオ共同体のイニシアティブ

本年の2月末くらいから、イタリアではコロナウイルスの蔓延によって次々と高齢者が命を落としていった。この時期、治療に使う人工呼吸器の数が少ないので、まだ未来がある若者に優先的にその器械が回されるために、高齢者が命を落としているのだという噂が流れた。しかし、若者の中にも感染者が現れ、死亡する者も出て来た。それ以降、そのような流言は影を潜めた。そのような動きの中、立ち上がったのが聖エジディオ共同体である。「今日の文明、文化、歴史を築いて来たのは、高齢者たちだ。その人たちは今必要がなくなったからと言って、直ちに死んでいいというものではない」という主張の下、「高齢者は未来である」というキャンペーンを展開したのだ。それには、EU内の多くの政財界のみならず、スポーツ界からも芸術方面からも多大の支持が寄せられ、署名運動も展開された。この運動に関連して、ロンドンから寄せられたある書簡には、「私たちはまだ、虫を見る世界を持っている。また、空気の良い匂いも、鼻をつく嫌な臭いもわかる。我々は健全な過去に戻ることができるだろう。母なる大地はまだ生きていたいと言っている。そこで高齢者と若者との世代を超えた対話も進んでいこう」と記されていた。

聖エジディオ共同体は、アフリカのコロナウイルスの感染拡大以前から、アフリカの貧困地区に感染が広がったら大変なことになると警告を発していた。その警告のおかげで、モザンビーク、タンザニア、中央アフリカなどでは適切な処置がなされたため、コロナウイルスの災厄が大きく広がらずに済んだのであった。

中国との外交問題

2018年9月22日、ヴァチカン市国は、中国北京政府と暫定的外交関係を樹立した（本誌2019年2月号「ヴァチカン便り」36参照）。その合意書では、2年後、つまり2020年9月を目標にこの暫定的な条件を見直すように表記している。ところが、2020年2月から6月までは、コロナウイルスの世界良的な蔓延を受けて、今年9月の会談は2021年9月に延期された。双方からは、さらに具体的な話し合いに身を投じたいところで、両者の関係には多くの問題が存在しているようだ。2年前の暫定的取り決めの内容については、ヴァチカン側は一部の人が知らない。北京側は当事者たちの極秘事項だ。ヴァチカン側としては、「信教の自由」のない中国共産党の支配体制の国に対して、良好な関係を維持することに懸念を示している者も少なくない。

香港のジョセフ・ゼン枢機卿は、現状の外交関係には反対している。ビルマのチャールス・ボ大司教も反対している。しかし法王をはじめとしてその上層部も、中国の上層部も両国の外交関係樹立を喜び、その改善が進むことを期待している。法王は、コロナウイルスが中国内で感染拡大しはじめたときに、イタリア中の薬局から、マスク70万枚を集めて中国に送り、中国指導部から感謝されている。去る2月、コロナウイルスがヨーロッパ中に蔓延する前、ヴァチカン側のイニシアティブでヴァチカン側の外相級の人と中国の外相役のワン・イーとがドイツのミュンヘンで会談している。その席で中国側は、西洋側の中国に対する偏見を、あるいは習近平に対する偏見を、ヴァチカンの力で取り除くように依頼していたのだ。

「碍」の字表記問題再考（8）

明治以降の各種教育法令、窮民救済制度における対象者の表記を前号まで検証してきた。そのなかで1929年（昭和4）に制定された救護法に「身体ノ障碍ニ因リ」と記され、ここに初めて「障碍」の表記を確認した。従来とは異なる障碍という新たな表記を用いたのは何故なのか、救護法制定の背景、経緯を含めて詳しく見ることにしたい。

救護法

従来の窮民救済法では対応できず、新たな仕組みとして策定されたのが救護法である。内容的にはヨーロッパ諸国の救貧法を参考にしている。その救護法の被援護者の項目に初めて障碍の表記が登場したのである。

救護法制定に向けては1928年（昭和3）に政府の社会局が要救護者調査を実施しているが、その調査資料には目的、対象者などが次のように記されている。

- 一、調査ノ目的 救貧制度ニ関スル資料ヲ得ル為之ヲ行フモノトス
- 二、左ニ掲グル者ニシテ貧困ノ為生活スルコト能ハザル者
 - イ、不具癱疾、疾病、傷痍其ノ他心身ノ障碍ニ因リ労務ニ支障アル者
 - ロ、妊産婦
 - ハ、満六十歳以上ノ老若
 - ニ、尋常小学校ノ教科ヲ修了セザル十四歳未満ノ幼者
 - ホ、前各号ニ該当セザルモノ
- 三、調査ノ対象中イ、ロニ該当スルモノノ範囲ハ左ノ如シ
 - 不具癱疾
 - (1) 常ニ就床ヲ要シ且複雑ナル介護ヲ要スルモノ
 - (2) 複雑ナル介護ヲ要セザルモノ常ニ就床ヲ要スルモノ
 - (3) 心神喪失ノ常況ニ在ルモノ
 - (4) 心神耗弱ノ為監視又ハ介護ヲ要スルモノ
 - (5) 心身障碍ニ因リ終身自用ヲ弁ジ得ルニ過ギザルモノ
 - 其ノ他ノ心身障碍
 - (1) 白痴
 - (2) 痴愚
 - (3) 終身著シク労務ニ支障アルモノ
 - (4) 著シク身体虚弱ナルモノ

項目の二のイにおいて、「不具癱疾、疾病、傷痍其ノ他心身ノ障碍ニ因リ労務ニ支障アル者」と対象者が記載されている。不具癱疾は従来の各種法律で用いられている障害者を表す用語である。それに加えて、新たに「心身ノ障碍ニ因リ労務ニ支障アル者」という表記がなされているのである。

項目の三では、不具癱疾の具体的な状態について書かれており、その(5)で「心身障碍ニ因リ」の記述が見られる。救護法では、「精神又ハ身体ノ障碍ニ因リ」と記され、この調査資料では「心身ノ障碍」という表記が用いられている。ひとくくりに不具癱疾と記されていた従来の文書の表記とは異なり、障害の状態を詳細に記述している。何故、このような表記になったのであろうか？

救護法制定に際しては、ヨーロッパ諸国の法律を参考にしている。そのことが表記の変容に大いに影響しているのではないと思われる。近代国家の道を標榜する当時のわが国にとって「脱亜入欧」は重要なキーワードの一つであった。資本主義の合理性、効率性の理念にのっとり、わが国はさまざまな改革を推し進めている。この救護法においても諸外国を参考にしている部分が随所に見られる。

その一つが、年齢条件の部分である。救護法では対象者を、「六十五歳以上ノ老衰者」と定めているが、何故「六十五歳以上」の年齢条件にしたのか。これに定めた理由が社会局の資料に残されており、次のように書かれている（抜粋）。

六十五歳ト定メタル理由

諸外国ノ立法例ニ於イテハ老若ノ救護ニ関シテ養老年金制度又ハ保険制度ニ於テ老若ノ年齢ヲ六十歳乃至七十歳ト為セルモノ其ノ最モ多キハ六十五歳ナリトス

仏蘭西	養老年金	六十歳ヨリ	仏国社会保険法
独乙	同	六十五歳ヨリ	帝国保険条例
伊太利	同	六十五歳ヨリ	癱疾老年保険令
英国	同	六十五歳ヨリ	寡婦孤児及老齢掛年金法

諸外国の年齢条件の事例をあげ、65歳以上を対象とする国が多く、わが国もそれに倣ったということが書かれている。救護法に登場した「障碍」の表記もおそらく、年齢条件と同様に諸外国を参考にしたのではないかと考えられる。しかし、障碍の表記を用いたことについては資料のなかでは確認できていない。そこで筆者が注目したのがイギリスの救貧法である。

エリザベス救貧法（The Elizabethan Poor Law）

イギリスの最初の救貧法は、1531年ヘンリー8世時代に貧民の救済と抑圧を目的に制定されている。その後、エリザベス1世時代の1601年に新たに作られている。当時の立法によって集大成された救貧諸法の通称がエリザベス救貧法である。この救貧法は、無産貧民による社会秩序の混乱に対して、就労義務を強制することによって收拾を図ることを目的としている。その目的を達成するためにキリスト教信者の教区を一つの行政単位として、貧民を抑圧的に管理したのである。就労を強制するため、貧民の労働能力の有無で「労働可能貧民」「労働不能貧民」「児童」などに分類している。

この救貧法は、労働可能な貧民は作業所に収容して強制的に就労させ、高齢者、病人、障害者など労働が難しい者に対しては保護するという法律であった。

このエリザベス救貧法に関する資料に1598年のTHE ELIZABETHAN POOR LAWがある。抜粋して紹介する。

1598 THE ELIZABETHAN POOR LAW

It can be inferred, according to the Webbs, that in the last quarter of the sixteenth century the social condition of the manual working class was changing considerably for the worse. Poor harvests, due in part to bad weather, meant rapidly rising food prices, culminating in the cold and rainy years 1594-1598, in dearth almost amounting to famine. The years 1596-1597 were specially critical periods of high prices, threatened rebellion and extreme poverty. It was reported that the towns were full of beggars and that men and women died of want in the streets. When a new Parliament met in 1597, after an interval of four years, the chronic situation of the poor was the main topic of concern.

- (a) 39 Elizabeth c. I . An Act against the decaying of townes and houses of husbandrie.
- (b) 39 Elizabeth c. II. An Acte for the mintenance of Husbandrie and tillage.
- (c) 39 Elizabeth c. III. An Acte for the reliefe of the Poore.
- (d) 39 Elizabeth c. IIII. An Acte for punishment of Rogues, Vagabonds, and sturdie beggars.
- (e) 39 Elizabeth c. v. An Acte for erecting of Hospitals, or abiding and working houses for the poore.
- (f) 39 Elizabeth c. vi. An Acte to reforme deceipts and breaches of trust touching lands given to charitable uses.

Of these six acts the most important was the third the Acte for the relief of the Poore. This Act is the basis of the legal duty of the state to relieve the poor. It required the appointment, in every parish, of Overseers of the Poor, and specifically imposed upon them, in conjunction with Church-wardens, the duty of providing for all the various classes of the destitute, whether able-bodied or impotent, children or aged, lame or blind, or otherwise "without means to maintain themselves". (下線は筆者が強調)

要旨は次のとおりである。1596年から1598年にかけてイギリスでは悪天候により農業における収穫量も少なく、食料価格が高騰するなど極度の貧困に苦しめられている。それにより、治安状態も悪く、町は物乞いであふれ、多くの餓死者もいて、労働者階級の社会的状況が悪化している。その状況のなかで、「町や家畜の家の腐敗に関する法律」「ハスバンドリーと耕作の管理のための行為」「貧困層の救済のための行動」「物乞いを罰する行為」「病院建設や貧民のための住居および労働する家を建てる行為」「慈善目的のための土地に関する詐欺と違反を改革するための行為」などで貧困者の救済を説いている。この資料のなかで注目するのが下線部分に記された障害者の表記である。

【参考資料】

寺脇隆夫『救護法成立・施行関係資料集成』ドメス出版、2007年。
 小山路男『イギリス救貧法史論』日本評論新社、2018年。

第332回研究報告会（6月29日）

日本のキルケゴール受容史における大谷愛人のキルケゴール研究

金子 昭

新型コロナウイルス感染拡大により自粛していた研究報告会が、出席者も研究所員に限定してであるが、3カ月ぶりに再開された。

今回の発表では、大谷^{ひでひと}愛人慶應義塾大学名誉教授（1924～2018）によるキルケゴール研究が明治以来の日本のキルケゴール受容史においてどのような位置付けを有しているかについて、研究報告を行った。

最初に、大谷愛人所蔵の貴重なキルケゴール関係蔵書が、2018年に一括して天理図書館に寄贈されたことについて述べた。天理図書館にはすでにキルケゴールの初版本が貴重書として収蔵されており、これを中核としてデンマーク語による関連書籍が揃うことで、研究者にとって一層魅力のあるキルケゴールコレクションとなった（現在は整理中のために閲覧は不可である）。

大谷愛人の主要著作は、『キルケゴール青年時代の研究』（正1966、続1968）、『キルケゴール著作活動の研究』（前篇1989、後篇1991）、『キルケゴール教会闘争の研究』（2007）の3部作全5冊で、日本におけるキルケゴール研究の最高峰をなす著作群である。これほどのキルケゴール研究の大著は世界でも類例を見ない（本文部分だけで全5,649頁）。すべてデンマーク語による原典や研究書等に基づき、徹底した基礎研究であり、綿密な文献研究である。デンマーク精神史を踏まえ、当時の政治社会的な背景や哲学思想の動向を含め、文学や神学（デンマーク教会史）にも細心に目配りして執筆された。

日本のキルケゴール受容史は、大きく6期に分けられる。

- ・第1期「紹介引用期」
1898年（明治31）～1914年（大正3）
- ・第2期「研究開始期」
1915年（大正4）～1945年（昭和20）
- ・第3期「研究再開期」
1946年（昭和21）～1974年（昭和49）
- ・第4期「研究展開期」（前期）
1975年（昭和50）～1987年（昭和62）
- ・第5期「研究展開期」（後期）
1988年（昭和63）～1999年（平成11）
- ・第6期「研究成熟期」
2000年（平成12）～現在

キルケゴールはドイツ語や英訳を通じて、主に神学や文学の領域において受け入れられた（第1期）。すでに戦前に、和辻

哲郎による包括的な研究書や三木清編集による3巻本の選集が出ている（第2期）。戦後になって、キルケゴールが広く知的読者層に読まれるようになった（第3期）。この時期は実存主義が流行し、キルケゴールも実存主義の文脈で受け入れられた。『キルケゴール著作集』（白水社）全21巻及び別巻が刊行されたのもこの時期である。実存主義の衰退期に入ると（第4期・第5期）、キルケゴールそのものへの関心が高まり、デンマーク語原典によるキルケゴール研究が本格化するようになった。その後、研究者の世代交代も進んで、東京と関西にそれぞれ存在していたキルケゴール協会が“合流”して「キルケゴール協会」として再発足した（第6期）。

大谷愛人は第3期に研究を始め、すでにこの時期の終わり頃には実存主義の枠組みにとらわれないキルケゴールの基礎研究をデンマーク語に基づいて行い（『キルケゴール青年時代の研究』正・続）、第4期・第5期以後の本格的なキルケゴール研究の先駆けになった。労作『キルケゴール著作活動の研究』（前篇・後篇）の刊行は、第5期「研究展開期」（後期）である。また、最後の『キルケゴール教会闘争の研究』は第6期のものであるが、大谷は「キルケゴール協会」には関わっていない。

日本における多くの西洋思想受容の場合と同様、大谷愛人によるキルケゴールの基礎研究は外国文化（キルケゴール在世当時のデンマーク文化）との関わりでキルケゴールを受容し、日本語によってこれを公表するというものであった。なお、大谷の研究は、どの山脈（学派・学閥）からも離れて、それ自体で聳え立つ富士山のように、孤高で卓越した境位にある。

『グローバル天理』年間購読のご案内

原則的に新年度は1月号からとなっております。購読料については、送料のみの実費負担です。申し込みは、封書、FAX、メールでお願い致します（お電話での申し込みはご遠慮下さい）。毎月の希望冊数と、氏名（フリガナも）、郵便番号、住所、電話、FAX、E-Mail、職業をお知らせ下さい。申し込み受付後に振込み用紙を送付致します。切手・現金でのお支払いはご遠慮くださいますようお願い致します。振込みを確認後、発送させていただきます。

送料（ヤマト運輸DM便）

全国一律167円（角2封筒、重さ1kg〔約20冊〕まで）

【例】毎月購読167円×12カ月＝2,004円

問い合わせ先：

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

天理大学 おやさと研究所「グローバル天理」編集部

FAX: 0743-63-7255

E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

グローバル天理

第21巻 第8号（通巻248号）

2020年（令和2年）8月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 永尾教昭

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan